

ごだいきぶね 里海は「五大力船」に乗って

木更津市 J F 金田所属・NPO 法人盤州里海の会理事長 金萬智男さん

J F 金田地区組合員総代・NPO 法人盤州里海の会監事 実形博行さん

インタビュー・構成：なかじま・みつる



●プロフィール

きんまん・のりお（写真左）1959年木更津市生まれ。高校卒業後家業のノリ養殖業・採貝業を継ぐ。98年ネットサイト「江戸前きんのり丸」を設け、ノリやアサリの直販を始め、盤洲干潟や漁暮らしの情報をウェブサイトで流し、市民と交流する大切さを知る。04年NPO盤州里海の会設立、絶滅危惧種アサクサノリ復活計画など斬新なプログラムを提供する活動を続ける。

じつかた・ひろゆき（写真右）60年木更津市生まれ。家業のスタテ漁「つぼや丸」・ノリ養殖業を経営。金萬氏と小中学校同窓という仲から里海活動に協力、里海の会設立メンバーに加わる。同会監事。スタテ漁の体験学習を立案実施、テレビ出演など広報担当役として活動している。

【リード】

「里海」は、海辺の環境や漁業漁村を表現した新しい言葉としてここ数年よく使われるようになりました。「里海」については、2004年11月号で、高知県柏島の黒潮実感センター・神田優さん、昨年8月号の千葉県海の博物館・菊地則雄さんの記事を通して紹介しましたが、千葉県木更津市 J F 金田所属の金萬智男さんも、漁業者による「海めぐりの里」づくり活動を展開してきました。

今回は、金萬さんと仲間の漁業者で2004年に設立したNPO法人「盤州里海の会」が取り組んできた絶滅危惧種「アサクサノリ養殖復

活プロジェクト」や、海の体験学習の成果について、そして、次のステップとして、里海活動を通して新しい漁業のかたちづくりに取り組む計画について、金萬智男さんと実形博行さんのお二人にお話を伺いました。

——お二人が写る写真は、今年1月15日、養殖復活に成功した「アサクサノリ」の「干し海苔」を浅草寺に奉納した時のスナップです。漁師の祝い衣「万祝」（まいわい）を羽織り仲見世を歩きました。

漁業を応援してくれる市民たち

——「里海」ということばに、どういう思いを込めてきたのですか。

金萬 おれたち漁師は、「海」は稼ぎの場所なので、仕事に行くといえば、目の前の「ギョバ」のほかにはいいようがありません。海という自然を守ろうとか、海辺の環境を大切にと皆さんはいいますが、「自然」も「環境」も実感がわきません。そうかといって、自分らの地域を「漁村」というかといえば、それもしっくりきません。

10数年前に、海苔やアサリを直接販売するネットショップ「江戸前きんのり丸」というウェブサイトをたちあげました。おかげさまで予想以上に好評でした。それまで、漁協漁連を通じて販売していたときには味わえなかった楽しさを知りました。販売して収入を得るだけではな

く、購入してくれた消費者の方々とネットやメールを通じて情報交換しながら、自分らの仕事である漁業や漁場について、消費者の人たちは、もっと詳しく知りたがっていることに気づきました。

こうして、ウェブサイトには東京湾の漁やノリ養殖のこと、先輩漁師から聞いた昔の漁法のこと、盤洲干潟の魚貝や生き物たちのことを発信していきました。海や干潟のことをもっと知りたい、自分で食べたものが育つ海を見たいという声がたくさん寄せられました。

漁連—漁協—組合員という仕組みの中でしか漁業はできないとばかり思い込んできたんですが、もしかしたらすこし違った「道」のたどり方も可能ではないのか、と思い始めました。

コラボレーションとしての里海

——それが「里海」だったのですね。

金萬 言葉の意味より、消費者である市民の人たちに楽しんでもらえて、自分も楽しめる、そんな「漁業」の形があってもいいんじゃないのか。そんなイメージが湧いてきました。漁師が養殖した海苔を、市民に天日干しで板海苔を作ってもらおう。天日干しならぜひやってみたいという声をたくさんの方から伺いました。

老漁師の「アサクサノリをもう一度食べたい」というひと言を聞きました。それなら、やって

みようじゃないか。いまや絶滅危惧種となっていたアサクサノリの養殖を復活させ、そのアサクサノリを市民の人たちと一緒に天日干しし、海苔巻きを食べたら、楽しいだろうな。江戸前アサクサノリ養殖復活計画は、こうして始まりました。専用のウェブサイトには、SATOUMIのことばを使いました。

自分ひとりからはじめ、市民の関心がとても高く、マスコミでも取り上げてくれましたので、仲間が二人、三人と増えていきました。こうして2004年、漁師仲間と水産業者だけを正会員とするNPO法人「盤州里海の会」が設立されたのです。

——なぜ、NPOだったのですか。

組合は地域組織です。なにをやるにも役員会の承認を得ながらでは手間がかかります。それを考えたら、自主的に事業目的を設定できるNPO組織がいいのではと単純に考えました。

なにより、漁業者にとって遠い存在の消費者の意見を取り入れることができ、市民にも参加してもらいながら事業を進めるわけですから、組合とは別組織のほうが都合がよいのです。ひとつだけ組織の枠組みを決めました。理事には漁業権者か、組合員に準じた水産関係者に限定しました。

市民に公開して、事業計画や体験教室のプログラムなどの情報を流し、参加してもらうことで活動を支えてもらいます。

つまり、「里海」を自分流に表現すると、新しい漁業の姿を求めて漁業プロジェクトを消費者に提案し、市民に参加してもらい、協働参画型のコラボレーション（共同作業）で、ともに楽しんで交流する場と言えるのかもしれませんが。

市民は、直接漁業を営むわけではありませんが、漁業を体験する「楽しさ」を味わえると思います。そういう楽しいプロジェクトを提案しながら異業種の人々が集う「めぐりの里」づくりが、漁業・漁村の活性化につながるのではないのでしょうか。

地産地消あってこそ「里海」

——絶滅危惧種「アサクサノリ」養殖に成功されたそうですね。つぎに、新しい計画を立てていると聞きました。

実形 おかげさまで、会のメンバー6名が、今年5万枚のアサクサノリを生産できました。計画してから3年目で、第1段階の目標が達成され、ひと区切りつきました。会としては、これまでの活動を基に、ステップアップを図るための二つの方向をとろうとみんなで確認しあったところです。

金萬 今後の展開としては、アサクサノリの増産体制をつくり、地域の地場ブランドとして、



生海苔を加工・販売する流通のしくみづくりに取り組もうと考えています。天日干し海苔製品化をすすめ、海苔問屋や海苔佃煮会社などとも取引を検討しています。

また、独自ブランド商品の開発や販売をすすめるため、会員個人個人が出資して、新たな会社組織か、経済産業省の新制度のもとで認可される有限責任会社・組合（LLP）などの設立についての勉強を始めています。水産庁の「国際水産物新需要創出ビジネスモデル事業」（LLC制度）のような新しい漁業の仕事場作りにかせるものは食欲に利用していくつもりです。

実形 NPO活動によって築いてきた市民の応援体制をいかし、地元木更津市や商工会議所との協力体制もとっていきます。具体的には、東京湾アクアライン木更津側金田高速バスターミナル（東京駅から40分）脇に、大きな駐車場つきの「わくわく市場」があります。木更津市が所有する敷地に木更津観光物産が運営する地場商品を販売する市場ですが、この施設や駐車場を利用させてもらう試みも始めました。

潮干狩りや海水浴シーズンが賑わうだけで、オフシーズンは利用者も少ないため、里海の会の天日干し海苔づくり教室イベントをここで開催させてほしいと申し入れたら、大歓迎してくれました。2月18日に、この場所を使って天日干し海苔作りイベントが行われ、広々としたスペースを使えるため参加者に大好評でした。

「わくわく市場」側も、オフシーズンに100人規模のイベントが行われ、テレビや新聞にも広報されるメリットの大きさに喜んでもらえました。

地域の活性化のため、木更津のまちづくりに貢献できるような地元との協力体制ができればと考えています。

ごだいきぶね 夢じゃないぞ「五大力船」構想

金萬 盤州里海の会としての第2番目の目標ですが、アサクサノリの次に取り組む「復活作戦」には、ハマグリを考えています。ハマグリは全国的に放流事業が「増殖」の主流ですが、盤洲干潟にわずかに生息しているハマグリをどうしたら「生産」できるまでに復活させることができるかの調査研究を本格的にはじめます。

ハマグリ復活プロジェクトをすすめるのに、大切なポイントがあります。それは、「ハマグリを復活させる」のが最終目的ではなく、木更津のかつての名物「ハマグリの佃煮」産業の復活こそが達成目標だということです。地場ブラン

ドの新たな収入源として産業化されて、はじめて地産地消の効果が地元にもたらされることになるのです。

一番目の会社組織設立で商品開発を試みたいものとしては、先ほどお話した生海苔の需要開拓や商品化のほかに、盤洲干潟でとれる未利用の魚貝（シオフキガイ・マテガイ・ムラサキイガイ・イボキサゴやハゼやカレイなど）を考えています。新規需要ビジネスモデル事業の構想名は「ごだいきぶね五大力船」と名づけました。江戸をつなぐ海運・海産流通拠点であった木更津の湊をゆきかっていた運搬帆船「五大力船」のかつての勇士にあやかってつけました。

アサクサノリ復活に6年かかりました。だからハマグリにも6年かけようと思います。金額は少なくとも、新しい地場商品が生まれ、環境教育を取り入れた観光漁業が根付けば、地産地消型の地域の元気な姿が浮き上がるはずです。

（聞き手 中島 満）

プロローグ（1） 実形さんから最後にひと言いただきました。「里海の活動でいちばんうれしかったのは、これまで知らなかった市民のかたがたが楽しんでくれて、自分らの漁業という仕事をいろんな形で応援してくれていることがわかったことです。お台場の小学生たちの海苔干し教室に協力して、小学生たちが、はじめは水に触れるのもしり込みしていたのに、次第に自分の役割分担を自分たちで仕切るようになる

のをみて、つくづく、漁業の仕事をやっているよかったです。」

プロローグ（2） 今回のお二人のお話からたくさんのお話を教えていただきました。とくに、金萬さんがリーダーになって設立した NPO 法人「盤州里海の会」は、金萬さんや実形さんが所属する金田漁業協同組合という木更津市金田地域の漁業地区を代表する組織では取り組めない市民の応援を受けて実行するいろいろな事業を行っていることの意味は実に大きいと思います。

そして、また、NPO 法人では、行えない営利事業を行うために、グローバル時代に対応した中小規模のベンチャービジネスに取り組む人々を支援する目的で設けられた経済産業省が主管する LLP：有限責任会社を設立しようと準備しています。

漁協が取り組めない事業を漁業権や組合員という資格を持った所属組合員によって組織化された「NPO 法人」と「会社」組織を相互に機能させて地域活性化を図ろうという取り組みにこそ、「漁業・漁村のあたらしい“かたち”」を考えるカギが隠されているような気がします。

copyright 2007, manabooks-m. nakajima,
& Norio. Kinman, Hiroyuki. Jitsukata
& JFkyousuiren